

2 0 1 1 年度修士論文

MGTA によるフェンシングにおける
ミニム～ジュニア期の選手育成プロセスに関する研究

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域
5009A009-4
池内 祥

指導教官： 武藤 泰明 教授

目次

第1章	研究背景と意義	3
第2章	フェンシングに関する基礎情報	5
2-1	フェンシング競技の競技体系に関して	5
2-2	年齢別の呼称	5
第3章	研究方法	5
3-1	調査対象者	5
3-2	調査の方法	6
3-3	分析方法	6
第4章	調査結果	8
4-1	インタビュー1	8
4-2	インタビュー2	12
第5章	MGTAによる分析結果	15
5-1	概念	15
5-2	カテゴリー	20
5-3	結果図	21
5-4	ストーリーライン	21
第6章	考察	23
6-1	高い競技力を持つ選手を育成するための要素とプロセス	23
6-2	グラウンデット・セオリーの性質に関して	23
6-3	研究の課題	24
6-4	インプリケーション	24
参考文献		26

第1章 研究背景と意義

平成22年8月26日に文部科学省は今後の日本のスポーツ政策の基本的方向性を示す「スポーツ立国戦略」を発表した。その中には5つの重点戦略の目標と主な施策が記述されている。特に「世界で競い合うトップアスリートの育成・強化」の項目内の「ジュニア期からトップレベルに至る戦略的支援の強化」には「ジュニア期からの中・長期的な強化・育成戦略」が掲げられている。

筆者は競技者と指導者として15年間フェンシング競技に携わり、同年代の選手の太田雄貴選手が2008年の北京オリンピックで史上初の男子個人フルレ銀メダルを獲得した。その際、銀メダル獲得に至るまでの「600日合宿」や「外国人コーチ招聘」等の戦略を構築し実行した経緯を目の当たりにした。日本フェンシング協会の北京オリンピックでの成功は、財政的、人的資源が限られているマイナースポーツ団体にとって、戦略的な強化によって世界のトップレベルで高いパフォーマンスを発揮することが可能であることを示したのではないだろうか。

また、海外でのトップスポーツの国際競技力の研究において、国際競技力を決定づける要素は図1の様に3つのタイプに分類されている (De Bossher, 2006)。

- Macro level

社会的、文化的、地理、気候変動、都市化、政策システム、文化システム等の要因。Macro level の要因の多くは当事者によって操作不可能である場合が多い。

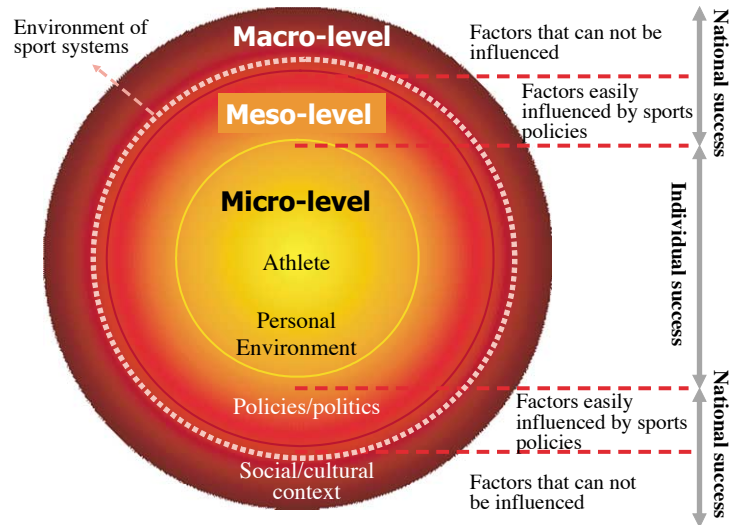
- Meso level

スポーツ政策や戦略等によって長期的に影響をあたえる要因。定量化することが難しく、それゆえ研究が未だ少ない。Macro level、Micro level と重複する領域も存在する。

- Micro level

個人的な遺伝や、コーチや友人といった近い環境に関する要因。先天的で操作不可能なものや可能な要因。

図 1



Model showing the relationship between factors determining individual and national success (De Bosscher & De Knop, 2003)

また、オリンピックの様なトップスポーツの成功を規定する要因は今まで主にミクロ的な遺伝や周囲の環境による要因があげられてきた。しかし、それだけではトップスポーツの成功の要因を広範に説明しているとは言い難く、ミクロレベルの研究はメゾレベルの研究に組み込まれることによって相乗効果を発揮する (De Bosscher, 2010)。

トップレベルのフェンシング競技においても佐藤 (2008) は心理学的側面、和田ほか (2007) は技術的側面から研究がなされている。しかし、それらマクロレベル研究を包括的に組み込んだ長期的に直接競技に影響するメゾレベルの研究はみられない。よって筆者はフェンシングのトップレベルに関するメゾレベル研究の必要性を感じた。

しかしながら、シニアのフェンシング日本代表が国際舞台で結果を残し始めた歴史は浅く、ジュニア (17歳以上19歳以下)・カデ (14歳以上16歳以下) レベルでは歴史的に上位16位以内に位置している。

よって、本研究では日本のフェンシングでシニア (20歳以上) に至るまでのジュニア・カデ・ミニム (13歳以下) の選手育成に関する重要な要素とそのプロセスを包括的に検討する。

第2章 フェンシングに関する基礎情報

2-1 フェンシング競技の競技体系に関して

フェンシング競技はルール、有効面の違いからフルーレ・エペ・サーブルの三種目に分かれる。日本国内では一般的にフルーレからフェンシング競技を始める場合が多く、その後選手の適性からのフルーレを継続するかエペ・サーブルを始めるか選択する。

2-2 年齢別の呼称

～14歳：ミニム

14歳～16歳：カデ

17歳～19歳：ジュニア

20歳以降：シニア

第3章 研究方法

3-1 調査対象者

本研究では2011年のJOCジュニアオリンピックカップ（於・駒沢オリンピック公園競技場）の男子カデフルーレの上位8位以内の選手の指導者で尚かつミニムとジュニアを指導している指導者2名を対象にした。男子カデフルーレの上位8位以内の選手の指導者を対象としたのは3つの理由が挙げられる。1点目は歴史的に世界レベルで上位に位置している日本のカデ、ジュニアクラスの男子フルーレに焦点をあてることで質の高い指導内容を理論化出来ると考えた。2点目は日本のフェンシングの発展の歴史から全国的にフルーレの指導者が多いため、調査対象者が多いと推測した。3点目は、多くの大学には常駐の指導者がいないのが実状であり指導者は高校の部活動や地域クラブで指導している。そのため、小学校から高校に相当するミニム～ジュニアの指導者が日本におけるフェンシングの指導の知識や技術を多く蓄積している層であると考え対象者とした。

3-2 調査の方法

本研究では1対1のインタビュー調査を2011年10月～11月に一度ずつ行った。方法としては、高いレベルにある指導者が意識している指導方法、重点すべきスキルを叙述的に語ってもらうため、半構造化インタビューを採用した。

第一に「ミニム～カデの生徒の指導において戦績をあげるために重要だと思う事は何ですか。」と質問し、一通り語ってもらったあとで更に聞きたい部分に関して深く質問した。また、面接は1時間程度で調査対象者の許可を得、ボイスレコーダーで録音した。

3-3 分析方法

本研究においては Modified Grounded Theory Approach (以下 MGTA) を用いて分析を行った。MGTA とは 1960 年代に医療学や看護学の分野で功績を残した B.G.グレイザーと A.L.ストラウスによって提唱されたデータに基づいた理論産出のための研究手法 Grounded Theory Approach (B.G.グレイザー、A.L.ストラウス 1967、以下 GTA) とその後、B.G.グレイザーと A.L.ストラウス両者がそれぞれ発展させた GTA を、木下(2006)が実践的に改変した研究方法である。

GTA は B.G.グレイザーと A.L.ストラウスの共著によるオリジナル版から量的・質的データに基づいた理論の産出、現場での実践を最終的な目的とし、看護、医療、福祉の現場で多く用いられてきた。

MGTA が日本国内で提唱されて後も特に近年では、看護、保健、医療、社会福祉、ソーシャルワーク、介護、リハビリテーション、教育、臨床心理など幅広いヒューマンサービス領域で注目されている(木下、2006)。

本研究で MGTA を採用した理由は以下の通りである。

- MGTA は対象領域がプロセス的特性を持っている事象に関し、それを分析し理論化することで実践的に現場へ応用しやすい性質を帯びている。フェンシングにおけるミニムからジュニアまでのコーチングは前述の領域と同様にサービスが長期にわたり提供されるものであり、プロセス的視点によって研究すべきであると考えた。
- MGTA は GTA の頃よりインタビュー調査から得られるデータの解釈、理論の構築における調査者の恣意性を前提とし、更なる理論の発展のための余

地を残している。先行研究のないフェンシングにおける育成プロセスの研究にとって、今後の理論の発展は当然必須であると考えた。

- **MGTA** は形成された理論の検証のため、実践が最終的な目的とされている。本研究においても形成された理論が現場で応用者により実践され、更なる理論の発展が期待されると考えた。

また、**MGTA** の具体的な分析手法は以下の通りである。

1. 分析テーマと分析焦点者に照らして、データの関連個所に着目し、それを一つのバリエーション（具体例）とし、かつ、他の類似具体例をも説明できると考えられる説明概念を生成する。
2. 概念を創る際に分析ワークシートを作成し、概念名、定義、最初の具体例などを記入する。
3. データ分析を進める中で、新たな概念を生成し、分析ワークシートは個々の概念ごとに作成する。
4. 同時並行で、他の具体例をデータから探し、ワークシートのバリエーション（具体例）欄に追加記入していく。具体例が豊富にでてこなければ、その概念は有効でないと判断する。
5. 生成した概念の完成度は類似が恣意的に偏る危険を防ぐ。その結果をワークシートの理論的メモ欄に記入していく。
6. 次に、生成した概念と他の概念ごとに検討し関係図にしていく。
7. 複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、その概念を簡潔に文章化し（ストーリーライン）、さらに結果図を作成する。

（木下、2006）

最後に、本研究は質的研究に区分される。その妥当性を確認するために分析の各段階で筆者と演習内で指導教官、修士課程の学生の協力を得てトライアンギュレーションを行った。

第4章 調査結果

4-1 インタビュー1

調査対象者：A氏

年齢

48歳

指導歴

高校生5年間

ミニム〜カデ13年間

シニアナショナルチームコーチ5年間

職業

聾学校教諭

日時

2011年10月7日

- ・ 調査者質問
- 調査対象者回答

(以下インタビュー記録)

- ・ どの年代を指導していらっしゃいますか。
 - 小学校1-中学3年までを指導しています。小中学生は月、水、土曜日が練習です。土曜は初心者向けの楽しむコース。20人。月、水は1時間半。成年の練習は7時-9時。同じ練習場で、月水木金曜日、火曜日以外の平日練習をしています。成年のある選手は週2回。高校生も学校の練習後来ます。
- ・ A氏の所属する県は国体等でも全国的にも安定して高いレベルにあると思います。特にその理由は何だとお考えですか？
 - 第一に生徒がやめなくて続けているから、長いスパンでゆっくり育てられる。高校だけだと2年で育てなくてはならないので無理があります。筋力は高校生で伸びる（しかし、それ以前にスキルをつけなくてはならない）。個性がいつ出るかわからないし、子どもはいつ伸びるかわからない。長いスパンで指導出来るからだと思います。
 - 楽しさを重視して教えています。ワンパターンな練習ではなく、パタ

ーンを多く取り入れて、バリエーションを増やして指導しています。

- ・ 現在のクラブの指導体制を教えてください。

➤ 昔はひとりで指導していたのですが、仕事が多いので現在は3人で指導しています。レッスン（対面式のマンツーマンの練習）を重視してする様にしています。レッスンはかなり重要だと捉えており、1回10～15分を目安に割いています。

➤ また、クラス別にしており、土曜は楽しくやりながら入門コースにしています。月、水は強くなる様にコースを分けています。月、水の子はやはり意識が高いので強くなる。週1回では（強くなるためには）足りないですね。

- ・ 指導力を培ったきっかけは何ですか。

➤ 自分の子ども、ジュニアの子どもを教えるようになって、勉強熱心になりました。世界選手権、海外や他の指導者のレッスンを見る様になりました。イタリアの有名なコーチ・デローザは、レッスンに関して上手いレッスンや下手なレッスンをどこが良い、どこが悪いという視点で見えていたという話を又聞きしました。なので、私もその様な視点でナショナルチームのコーチのレッスンを見るようにしています。ナショナルチームのコーチのレッスンは今と昔では確実に変化しています。時代に合わせた練習の変化が重要ですね。

- ・ レッスンに重要な要素は何でしょうか。

➤ タイミング、間合い、スピードですね。子どもの練習に、先ほどの3つ（タイミング、間合い、スピード）の観点で変化を与えて練習させている。また、これらはレッスン以外のフットワークでも重要です。特に敵が前に出てくる瞬間に入るアタックをよく教えます。

・ 子どもがやる様になってから研究熱心になったということが興味深かったです。

➤ 子どもが卒業しても同じ様な気持ちで指導します。世界大会に行って、エペのコーチとして派遣されてもフルーレも見ます。

➤ 基本は大事。技の組み立ては徐々に増やす。選手は突然強くなる。

➤ また、豊富なスタッフが常にいるわけではない。親子でフェンシングをする生徒が増えて、保護者（親）を指導者に取り込んでいる。トレーナーの

先生やフェンシング経験者の保護者等。

- ・ シニアとミニム～ジュニアの世界での位置の違いは何から来るといいますか。

- 逆に何でだと思いますか？

- ・ 大学の指導者の不在だと思います。

- 私もそう思う。量的な練習、体力的にハードな練習はしているけれども中身の濃い練習は出来ているのかと疑問に思います。（選手同士です）レッスン等は経験が現れます。

- ・ （職業としての）ポストと生活を保障すればいいのでしょうか？

- 大学の4年間は伸びる時期なのだが、選手同士で練習をしなくてはならない。すると練習での指導のレベルが下がります。選手が反応できるタイミング、出来ないタイミングを見極める能力等、細かい能力がコーチに求められますがその人材がいません。逆に、指導者が入れば競技力が上がる自信があります。また、コミュニケーション能力が重要であると思います。罵声を浴びせるだけでなく、モチベーションを引き出すことが大事です。怒るときは怒らなくてはいけないし、コーチが何から何まで教えすぎてもいけない。男子と女子で接し方も変えなくてはいけないし、子どもによって性格も全く異なる。そんな繊細で複雑な小さい子を教えた事のある人材が大学のコーチに就けば、モチベーションを引き出すノウハウを持っていると思います。また、コーチの学閥の垣根を取っ払う事。生活がかかっているから、競争が激しくなり研究熱心になる。

- ・ 他に原因は思い当たりますか？

- お金。遠征等でお金がかかるスポーツですから。

- ・ A氏のコーチ歴を教えてくださいよろしいですか。

- 初め現在とは別の場所で指導していた。移動して現在のクラブへ。

- ・ 最後にもう一度指導で一番重要だと思われることは何でしょうか。

- レッスンですね。レッスンはひらめきなのでたまに忘れてしまいますが、会話の様にコミュニケーションをとって理解し植えつけることです。前回の内容を思い出させてレッスンをつくりあげて行く。忘れていたらまたやり直

さなければいけない。また、モチベーションの引き出し方も重要です。（例えば練習で）上手に出来た子を残す。そうすることで、誉めて意欲を引き出す。そうすると子どもは視線を感じ、見られているという意識を感じる。気にかけてくれているのとそうでないのはかなり違います。指導者として目で教えることです。

終了

4-2 インタビュー2

調査対象者：B氏

年齢

34歳

指導歴

高校生10年間

ミニム4年間

カデナショナルチームコーチ5年間

職業

教諭

日時

2011年10月12日

- ・ 調査者質問
- 調査対象者回答

(以下本文)

- ・ 現在教えてらっしゃる年代と頻度を教えてください。
 - 高校生男子13人、女子3人を毎日教えています。16時から19時まで。また、中学生以下を男子9人、女子2人、月曜、金曜に教えています。木曜は中学生以下を高校の生徒と一緒に練習させています。
- ・ ミニムからジュニアの選手を育てる上で、重要だと意識していることは何ですか。
 - いくつかあると思いますが、まず親を巻き込むこと。親に練習に来てもらって、自分の子どもを見てもらう。そうすると、感情が移入して我が子の足りないところなど（技術、しつけ等）に関して家庭でも指導してもらうことが可能になります。親に見てもらう事で、練習場と家庭をつなぐ。その傍ら、親との距離感の取り方は絶妙でなければならない。偏り過ぎたりすると面倒です。親でも不手際がある場合があるので、その場合は親も含めて叱らなくてはならない場合がある。
- ・ Bさんは比較的若いコーチだと思うのですが、その様なスキルはどこ

で習得されたのでしょうか。

➤ 父が某県のフェンシング界の重鎮で、真剣に礼儀やしつけをしないとよそに出た時に損をすると教わっているので重視しています。それに加え、大分の高校の組織作りも参考にしています。全国選抜選手権を優勝したときは、選手の自発性を促した結果でした。

目標設定に関して選手たちには長期的な目標（何を達成したいのか）、中期的目標（どの大会で何位にならなければいけないのか）、短期的目標等（練習でどうしなければならないのか）を掲げさせています。ぼんやりとやっても効果があがらないため、明確に目的意識を設定することが重要です。目標を練習場の見える位置に掲示し、それは途中で変更可能、定期的に見直しさせている。実はこれはビジネス本等で学びました。

- Bさんの目標設定はどこにしているのですか。

➤ オリンピックのメダリストを育てること。

- なぜその目標を掲げたのですか。

➤ 例えば君（調査者）はなぜフェンシングをがんばりたい？・・・ほめられたいじゃん。すごいつて言われたいじゃん。そんな単純な動機ですよ。

- 技術的な指導はどのように心がけていらっしゃいますか。

➤ 基本的な技が練習の2/3を占めている。それに加えて戦略的な練習を心がけている。例えば **Situation Fighting** 等で練習に変化を付けさせる。これは日本フェンシング協会が主催する指導者講習会や、海外に遠征に行った際に、様々なコーチの指導方法を学びネタを増やしています。

- 今まで日本のフェンシングはミニム・カデレベルで世界でも通用するレベルを保っていたがシニアではなかなか通用していません。なぜだと思いますか。

➤ 今までもミニム・ジュニアレベルで他の種目もレベルが高かったわけではないと思います。特にエペ、サーブルでは世界に通用していない。フェンシングは感覚や意識が大きく左右するスポーツであり、イタリア等は気持ちで殆ど勝っている。どの種目もまず上位に残る様になれば自信がついて世界の常連になることが出来るのではないかな。

- そのためには何が必要だと思いますか。

- 世界で勝つということは海外で勝つということです。そのためには選手が海外慣れしないといけない。また、外国人と話す機会が必要です。日本人は国民性から道を譲ってしまいがちだが、そうではなく強い自己主張が必要。そういう意味で外国人コーチ（日本フェンシング協会が）を雇って外人慣れするのは良策だと思います。

- ワールドカップや海外合宿などで経験したことなのですが、例えば韓国はフランスに韓国人コーチを留学させ、還流させている。韓国のフェンシングは気持ちの部分強いのだが、それにフランスの技術を加えています。また、コーチはチームごとに食べて行ける環境にあり、3年程で結果を出さなければやめなければならない。つまり競争の環境にある。そこが大きな違いだと思います。

終了

第5章 MGTA による分析結果

5-1 概念

本研究では調査対象者 A, B の2名に面接調査を行った後、逐語に起こし2つのデータを分析した。その結果12個の概念が生成された。理論的飽和を確認するため更に概念に組み込むデータはないか確認し、追加すべきデータは追加した。これ以上生成する概念はないと確認した後、理論的飽和とした。それぞれの概念は以下の通りである。

概念1：概念名 選手をポジティブにモチベートする事

定義 “威圧的でない、自発的な選手の動機づけを行うこと”

バリエーション（具体例）

- ・ 誉めてポジティブなモチベーションを植え付ける
- ・ 長期的、中期的、短期的目標設定
- ・ コミュニケーション能力

理論的メモ（解釈）

- ・ コーチから期待・注目されているという認識
- ・ 内発的な動機の植え付け

概念2：概念名 技術的指導方法の研究

定義 “常に新しい指導内容・技術を研究して行くこと”

バリエーション（具体例）

- ・ 中央競技団体が主催する講習会へ参加する
- ・ 海外遠征時に各国のコーチのコーチングを学ぶ
- ・ 他分野からの応用
- ・ レッスン、フットワーク、ファイティング（実践形式練習）の研究
- ・ 時代に合わせた練習方法の変化
- ・ 選手が反応できるタイミング、出来ないタイミングを見極める能力等、

細かい能力がコーチに求められます

理論的メモ（解釈）

- ・ 指導方法の幅を広げ、広範囲な指導力を獲得する
- ・ 時代によって変化する技術、戦略に対応する

概念 3：概念名 しつけ

定義 “礼儀作法を教え込む事”

バリエーション（具体例）

- ・ 家庭と練習場で協力して指導

理論的メモ（解釈）

- ・ フェンシングへの導入段階から競技性の強い選手へ移行するために必要な要素

概念 4：概念名 視線

定義 “指導者から常に見られているという意識を与えること”

バリエーション（具体例）

- ・ 誉めて意欲を引き出す
- ・ 見られているという意識を感じる
- ・ 指導者として目で教える

理論的メモ（解釈）

- ・ 見られている感を覚える事で、生徒は期待を感じ意欲的に練習に取り組む。
- ・ 指導者との信頼関係が構築される。

概念 5：概念名 長期的な指導

定義 “ミニム、カデ、ジュニアにわたる長期的な指導”

バリエーション（具体例）

- ・ 選手は突然強くなる
- ・ 生徒がやめないで続けてくれる
- ・ 長いスパンで育てられる
- ・ 高校の2年半では育て上げるのが難しい
- ・ 子どもがいつ伸びるかわからない

理論的メモ（解釈）

- ・ 長期的な指導により、計画的な指導が可能になる。
- ・ 生徒の成長は予期しないタイミングで起こる。そのため長期的な指導が有効。

概念 6：概念名 上のクラスとの交流

定義 “上の年齢層の選手と一緒に練習する事で、次のクラスへの移行を円滑にする”

バリエーション（具体例）

- ・ 高校生も学校の練習の後に（成人の）練習場に来る
- ・ （中学生以下の生徒が）高校の生徒と一緒に練習

理論的メモ（解釈）

・ 年齢が上の選手と練習することで、自分よりも上のレベルに挑戦し競技力の成長が促進される。

概念 7：概念名 選手の段階に対応した指導

定義 “選手のフェンシングを始めた年数や学年、レベルに対応した指導”

バリエーション（具体例）

- ・ クラス別に分け、指導内容を変えている
- ・ 始めたばかりの子どもにはまず、フェンシングを好きになってもらう
- ・ 徐々に競技志向に誘導する

理論的メモ（解釈）

- ・ 発達段階に対応した指導。
- ・ 教室に楽しんで通うことでフェンシング競技への導入を円滑にする。
- ・ 競技志向への誘導。

概念 8：概念名 レッスンの咀嚼

定義 “レッスン（対面式練習）で会話の様にコーチと選手が技の展開を噛み砕いて学習すること”

バリエーション（具体例）

- ・ 会話の様にコミュニケーションし理解させて植えつける
- ・ 内容を思い出させてレッスンをつくりあげて行く
- ・ コミュニケーション能力

理論的メモ（解釈）

- フェンシングにおいて重要な練習のひとつであるレッスンで、コーチが選手に技の展開を会得させる。試合や実践形式の練習で用いる技の材料をレッスンによって得る。

概念 9：概念名 技の組み立て

定義 “試合や試合形式の練習において一連の戦略を立てる能力”

バリエーション（具体例）

- 基本は大事
- 技の組み立ては徐々に増やす

理論的メモ（解釈）

- 基本的な個々のフェンシングの技術とそれを戦略によって使い分ける能力。

概念 10：概念名 伸びる瞬間

定義 “個々の技術とその組み合わせの理解が選手の中で連鎖し、尚かつ試合で発揮される瞬間”

バリエーション（具体例）

- 選手は突然強くなる
- 個性がいつ出るかわからないし、子どもはいつ伸びるかわからない

理論的メモ（解釈）

- 選手の発展はいつ訪れるかわからない。
- 選手の発展は比例的ではない。
- 技術と戦略の理解と、最後に選手の自信や確信が選手の競技力をひとつ押し上げる。

概念 11：概念名 メンタルの指導

定義 “選手の性格や行動の傾向を分析し把握すること”

バリエーション（具体例）

- 怒るときは怒らなくてはいけないし、コーチが何から何まで教えすぎてもいけない

- 男子と女子で接し方も変えなくてはいけないし、子どもによって性格も全く異なる

理論的メモ（解釈）

- 選手の気持ちをフェンシングの練習に向けさせる為の要素

概念 1 2 : 概念名 家庭を巻き込む

定義 “親をフェンシングに巻き込んで家庭内で技術的、倫理的に指導すること”

バリエーション（具体例）

- 練習場と家庭をつなぐ
- 感情が移入して我が子の足りないところなど（技術、しつけ等）に関して家庭でも指導してもらうことが可能になります
- 豊富なスタッフが常にいるわけではない。親子でフェンシングをする生徒が増えて、保護者（親）を指導者に取り込んでいる。トレーナーの先生やフェンシング経験者の保護者等。

理論的メモ（解釈）

- 練習場でのフェンシングの練習は短い。家での倫理的な指導やフェンシングの技術に関して考えさせることで、指導内容が定着する。

5-2 カテゴリー

前節で概念が生成されたが、その後概念の有効性と概念同士の関係性を確認しながら、概念のまとまりであるカテゴリーを生成した。また、概念によっては1つの概念でも他との関係性から単独でカテゴリーとした概念もある。生成されたカテゴリーと構成する概念は以下の通りである。

- カテゴリー1：長期的な指導
 - 概念：長期的な指導

- カテゴリー2：メンタルの指導
 - 概念：メンタルの指導
 - 概念：しつけ
 - 概念：家庭を巻き込む

- カテゴリー3：技術的な指導
 - 概念：技術的指導方法の研究

- カテゴリー4：視線
 - 概念：視線

- カテゴリー5：モチベーション
 - 概念：選手をポジティブにモチベートすること

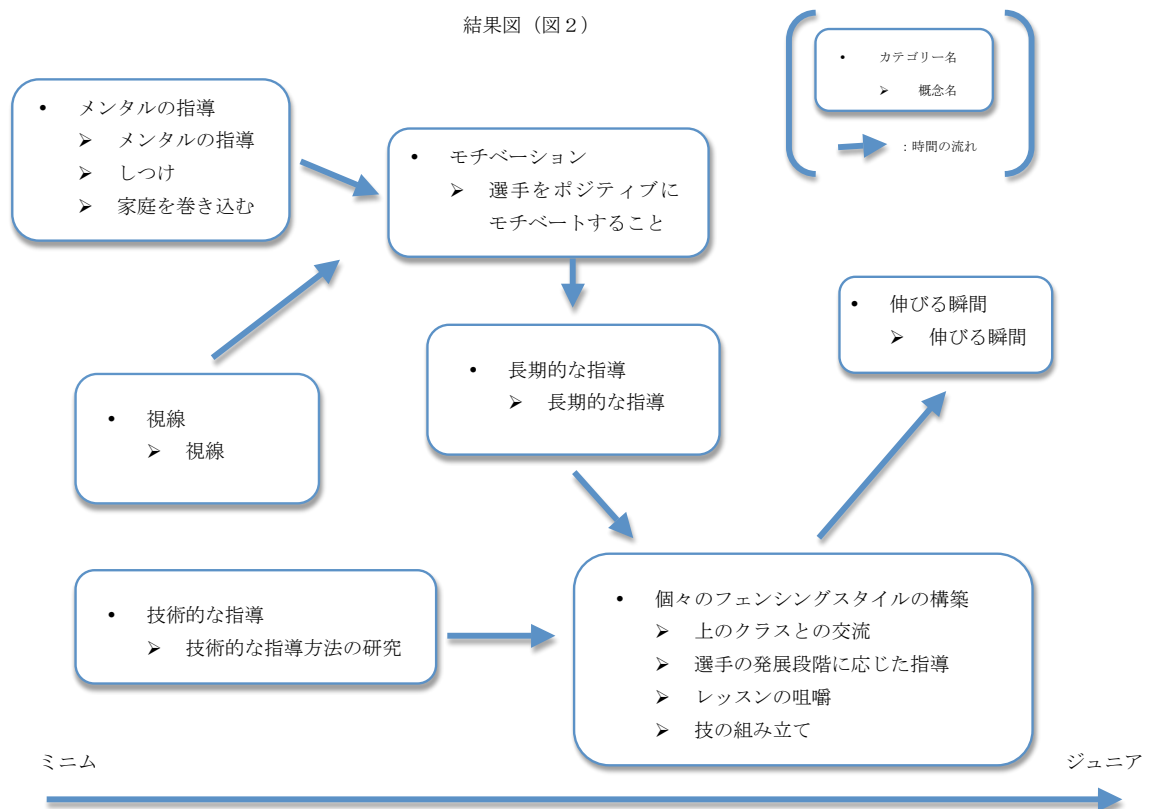
- カテゴリー6：個々のフェンシングスタイルの構築
 - 上のクラスとの交流
 - 選手の段階に対応した指導
 - レッスンの咀嚼
 - 技の組み立て

- カテゴリー7：伸びる瞬間
 - 概念：伸びる瞬間

5-3 結果図

次にカテゴリー同士の関係性とプロセスを検討しながら、結果図（図2）を作成した。

概念とカテゴリー形成と同様、関係性とプロセスの流れにおいて説明が漏れている部分や重複している部分がないか検討し作成した。



5-4 ストーリーライン

ストーリーラインとは分析結果を、生成した概念とカテゴリーだけで簡潔に文章化したものである。

MGTA では分析結果を確認するためにストーリーラインを記述する。文中でカテゴリーは**太字**で示し、概念は下線で示す。1つの概念がカテゴリーになっている場合は**太字と下線**で示した。

ミニムからジュニアまでの育成において、競技歴の高い選手を育成するためには大きく分けて3つの出発点がある。

1つは**メンタルの指導**である。指導者はクラブでの練習で技術の前に基本

的な礼儀やしつけを身につけ、フェンシングに取りくませなくてはならない。そのために子どもの性格や行動のパターンを把握し、ひとりひとりの接し方を変えてメンタルを指導していく。時には親と連携をとり家庭を巻き込んで、選手を練習場と家庭で育てることが有効である。

2つ目は視線である。生徒は見られている感触を覚えることで、指導者からの期待を感じ意欲的に練習に取り組むようになる。指導者は言葉に加え、伝える内容を目でより強く教えることでより高い意欲を引き出すことが出来る。指導者は常に選手に期待の視線を送り続けることが重要である。

メンタルの指導で選手の性格を把握しながら視線を送り続けることで、選手はポジティブにモチベーション保ちフェンシングの練習に打ち込む。

3つ目は技術的な指導である。指導者はメンタルの指導に加え、技術的な指導も指導方法の研究を重ねながら併行する。選手の発展段階に応じて対面式の練習「レッスン」で選手とコミュニケーションをとりながら、ひとつひとつ技の組み立てを指導する。選手はその内容を自分の中で理解し、レッスンを咀嚼していく。技のひとつひとつを自分のものにしながら選手はファイティング（実戦形式の練習）を通じて試す。その際に、年齢的に上のクラスと交流することで自分よりも上のレベルに挑戦し競技力の成長が促進され、選手は高いモチベーションの状態で長期的な指導のもと個々のフェンシングスタイルを構築していく。

以上の様なプロセスを経て、選手は成長する。そしてある日、選手の中でメンタルと技術が連鎖し試合で高いパフォーマンスが発揮される伸びる瞬間が訪れる。

第6章 考察

MGTA による研究ではストーリーラインの作成の段階で分析と考察が同時に進められる。よってストーリーラインが前頁で生成された図、すなわち本研究でのグラウンデット・セオリーを既に説明している。そのため、考察の内容がストーリーラインと多く重複することをはじめに記述しておく。

6-1 高い競技力を持つ選手を育成するための要素とプロセス

本研究ではメゾレベルの視点から MGTA によってインタビュー調査から得られたデータを分析し、フェンシングにおけるミニム～ジュニア期の選手育成における重要な要素とそのプロセスを記述した。

育成段階にあるミニム～ジュニア期の選手は長期的に指導者からの期待の込められた視線を感じながら、時にメンタルの指導を受け、選手として高いモチベーションを維持しフェンシングに打ち込む。指導者は常に選手の性格や行動のパターンを分析し把握しながら接していかなくてはならない。

また、選手は指導者による段階に応じたレッスンやファイティングを通し、選手独自のフェンシングのスタイルを確立していく。練習では上のクラスの選手との交流を通し、技術の向上を目指す。

そして、高いモチベーションの状態でも長期的にメンタルの指導と技術的な指導が併行して行われる中で、突如選手の中でメンタルと技術がリンクし試合で高いパフォーマンスが発揮される「伸びる瞬間」が訪れる。パフォーマンスが向上し高い競技力を持つ選手になるタイミングは正確に予想できないし、勿論選手によって異なる。そのため指導者は技術的にもメンタル的にも長期的に指導を行い、視線を送り続けなければならない。

6-2 グラウンデット・セオリーの性質に関して

今回、MGTA によりフェンシングにおけるミニム～ジュニア期の選手育成のための重要な要素とプロセスを図式化してグラウンデット・セオリーを生成した。ここで特に注意しておきたいのは、提示されたグラウンデット・セオリーの要素とプロセスを満たせば必ず競技力の高い選手が出来るわけではないということである。しかし、調査と分析によって競技力の高い選手を育成するためにはこの要素とプロセスを経由する必要があるという必要条件を提示できたと考える。

MGTA の最終目的は、GTA の頃より実践の現場への応用である。故に、今回提示したグラウンデット・セオリーも、応用者—すなわちここではフェンシングの指導者—によって実践の場で修正され、応用されることが求められる。

そして、更なる調査と分析によりこのグラウンデット・セオリーが発展することが望まれる。

6-3 研究の課題

本研究では2名の調査対象者にインタビュー調査を行った。調査対象者はどちらも日本でトップレベルの指導者である。各々シニアとカデのナショナルチームコーチを経験し、尚且つミニムからジュニアの指導も経験しているという希少な指導者である。よって調査対象者の数は必然的に少なくなり、分析の際のデータの解釈や概念とカテゴリーの形成には苦心した。

グラウンデット・セオリーは得られるデータに大きく依存することから、概念間の関係が明確でより深く広範囲を説明する理論を形成するためには、更に多くの対象者を選定しデータを得ることが必要だと感じた。

6-4 インプリケーション

現在の日本のフェンシング界のトップ選手は高校まで出身地で育てられ、大学進学と同時にリーグのある関東か関西に移動し、部活動として競技に打ち込む。しかし、大学には常駐の指導者がいない場合が殆どである。その環境の中で選手は選手同士でトレーニングメニューを組み、練習に取り組む。即ちそれは、大学の練習内容とは決して質の高いものではない事を意味する。

今回、本研究を通し選手の育成においてコーチからの長期的な一貫指導により技術的、メンタル的な指導がなされ、予測出来ないタイミングで競技力が向上することが明らかになった。

そのため、国際競技力向上につながる競技力の高い選手を育成するためには以下の方法が挙げられる。

1. 大学にコーチを常駐させ、出身地のコーチと密にコミュニケーションをとる。
2. 1が難しい場合は地方のクラブに所属し、継続して同じコーチの指導を受ける。
3. 高校卒業後、実業団に所属し競技を継続する。(現在、日本で2団体)

また、男子フルーレのナショナルチームで北京オリンピックに出場した太田、

千田はシニアクラスで JISS (国立スポーツ科学センター) に練習拠点を移し、外国人コーチの長期的な指導のもと競技を継続している。このことから、本研究で示されたグラウンデット・セオリーがシニアレベルでも一部適応可能ではないかと推測される。

更に、現在 JOC では東京都北区の味の素トレセンを生活拠点として、全国から発掘した優れた素質のあるジュニア選手を近隣の学校に通学させながら、各競技団体の一貫指導システムに基づいた指導を行うエリートアカデミー事業を行っている。フェンシングもフェンシング経験者や未経験者を含め 11 名エリートアカデミー事業で選手育成に参画しており、選手の競技力も高い。本研究のグラウンデット・セオリーが国際競技力の向上に寄与し、その信頼性を検証するためエリートアカデミーのフェンシング未経験者の育成プロセスに焦点を当て更なる理論の発展を目指したい。

参考文献

- Kalliopi Sotiriadou (Griffith University), David Shilbury (Deakin University) 2009; Australian Elite Development; An Organizational Perspective, Sports Management Review
- Veerie De Bosscher ; Faculty of Physical Education and Physiotherapy, Paul De Knop; Vrije Universiteit Brussel , Belgium Muller Institute, The Netherlands, Maarten Van Bottenburg; Sport Industry research Centre, Sheffield Hallam University, England (2006); A Conceptual Framework for Analysis Sports Policy Factors Leading to International Sporting Success; European Sport Management Quarterly Vol. 6, No. 2, 185-215,
- 木下 康仁 (2006)、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法、富山大学看護学会誌第6巻2号
- グレイザー, B&スト劳斯, A (1996); データ対話型理論の発見—データからいかに理論をうみだすか (discovery of the grounded theory); 新曜社
- 木下 康仁 (2003); グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践; 弘文堂
- 佐藤 秀明 (2008); フェンシング選手の心理的競技特性について—注意集中の視点から—A study on the psychological characteristic of fencing player: viewpoint of attention concentration—; 桜門体育学研究 桜門体育学研究 42, 35-47, 2007 日本大学文理学部桜門体育学会
- 和田 武真ほか (2007); フェンシング競技における戦い方に関する研究—ファント動作からみた分析; 日本体育学会大会予稿集 日本体育学会大会予稿集 (58), 社団法人日本体育学会